

July 1, 1997

比較宗教学・異端 ブックレポート
「異端とは何か」井出定治著
いのちのことば社
(1995年増補9刷)

A

東海聖書神学塾 教職志願者コース・基礎科2年
野町 真理

第1章 異端とは何か

1-1 歴史に現れた異端

異端（ギリシャ語でハイレシス）とはイエス・キリストを否定し、あるいは、最も大切なこととして伝えられた聖書の証言を曲解したものを指し、代表的なものとしては以下のような思想に分類できる。

- 1、人となって来たキリストを否認するもの
ドケチズム：キリスト仮現説
ギリシャ的霊肉（善悪）二元論から来るグノーシス主義
- 2、イエス・キリストが神であることを危うくするもの
「キリスト養子説」の流れのアリウス（320年頃）説とイオタ論争
現代ではエホバの証人
- 3、キリストの人性を危うくするもの
カルケドン会議（451年）で排斥されたエウテュケス派の主張
- 4、信仰運動の本質が変質するもの
マルキオン（140年頃）の主張やモンタノス運動

1-2 異端概念の混乱

1-3 異端を見分ける基準と定義

異端を見分ける基準は聖書（神のみことば）である。これにより異端を定義すると、「キリスト教を標榜していても、みことばの統一的な理解を分断してこれを拒み、信仰の基礎を破壊してしまうような、特定の教理や論理を主張するもの」と言える。

第2章 異端の教説と反論

2-1 モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）

創業者ジョセフ・スミス（1805-1844年）のプロフィール

- 1、彼はキリストを救い主として信じ、罪を悔い改めたという決断の時をいまだ持たず、むしろ関心はどこ教会に加わろうかという点にあった。
- 2、教会に反感を持っていた。
- 3、聖書に対する不信があった。
- 4、啓示概念が不備だった。

モルモン教では、聖書を完全な神のことばとは認めず、現在は聖書のみで神のみこころを知ることは不可能だと主張。「聖書」以外に「モルモン経」「教義と聖約」「高価なる真珠」という書物を権威ある書物とする。神観は多神教、救いは律法主義であり死者に対しても救いがあると主張する。

2-2 エホバの証人（ものみの塔）

創業者チャールズ・T・ラッセル（1852-1916年）のプロフィール

彼はもと組合教会員であったが、聖書に示されている「永遠の刑罰」の宣告に悩み、ついに聖書の「永遠の刑罰」の教えを否定することによって解決し、自分の新しい啓示と称するものの宣伝に生涯をささげた。文脈を無視した恣意的な聖書解釈によって様々な教理を作り上げ、キリストの神性を否定し、聖霊は活動力で

あると主張することによって三位一体の神を否定する。

2-3 世界基督教統一神霊協会（世界平和統一家庭連合：統一教会）

創立者文鮮明のプロフィール

彼は聖書を自分勝手に引用し、自分こそ再臨のメシアであり、一なるお方だと主張する。しかし彼が北朝鮮政府に社会秩序侵害罪（姦通罪）で捕らえられ、韓国では風紀紊乱罪で拘禁され、霊体交換布教（血わけと呼ばれる姦通行為により、悪魔によって汚れた血統を断ち、新しい血統に生まれ変わるというもの）によって邪教とされたと言われることの中には、これを多少割り引いて考えてみても、キリストと同一視することは全く出来ない。統一教会では聖書を一つの教科書、使命の終わったものとし、文鮮明が神からの啓示と称する主観的経験を受けたとする。その教説の基礎には陰陽道を置いている。汎神論的神観、肉体派的墮落論を持ち、イエスの十字架は挫折であったとする。

第3章 異端の共通点と理由

3-1 共通点

- 1、みことばとかかわりなく、霊の直接の働きを主張する
- 2、聖書をただ条件付きの規範でしかないとする
- 3、聖書以外の啓示を持つ
- 4、黙示録的表象の強調

3-2 異端の起こる理由

- 1、魔術師シモンの例－「神のようになろう」とする人間の、古き性質より起こる
- 2、戦いの中の護教論者－異文化との関わりの中で
- 3、マルキオンの異端－それなりの善意を持ちつつも極端に走って異端とされるもの

第4章 教会と異端

- 1、歴史の苦い教訓－教会が力による処置を取り入れることがあってはならない

2、福音の積極的な宣明

キリストにある福音こそが永遠の福音であり、これを積極的に宣べ伝え、それに生きることが異端に対する対処でなければならない。

- ・神の啓示は、キリストと聖書において完全に示されている
- ・神は三位一体のお方として働かれる
- ・キリストは神である
- ・キリストの贖いは完全である

3、組織的な学びの必要

日本人は受容の仕方、認識の仕方に直感的・情動的な構造を持っているため以下のような危険がある。

- ・一般の人々の場合
 - 1、熱心でさえあれば、信じる対象は何でも結構なのではないかという理解。
 - 2、ことばへの軽視。外国語のことばを翻訳するとき、そのことばの持つイメージを理解しないで日本語のそのことばのイメージをそのまま当てはめてしまうということ。特に「神」や「愛」ということば。
- ・キリスト者の場合
 - 1、信条への無関心
聖書のみを唱えて信条を否定し、実際には主観や特定の人物への依存が入り込む危険
 - 2、体験主義への危険
このため異端の問題から日本人の宗教的体質を考えると、まずキリスト教教理の組織的学びが必要。聖句の断片的理解にとどまっていたら、巧みに聖書を引用する異端の伝道に太刀打ちできない。

感想

大学生の下宿などを訪問して感じることはエホバの証人の方の伝道熱心な姿である。聖書に興味を持っている方のほとんどはエホバの方の訪問を受け、聖書研究へと導かれている。まさに本物を知っている私たちキリスト者に対するチャレンジであると感じる。そのような中で、エホバの証人の学びをしておられる方の中には何らかの疑問を持たれる方が多い。私が大学でお世話になったある教授は「わかっている人ほど自分のことばでそれを説明できる」ということをいつも語っておられた。キリスト教会を構成する一人一人のキリスト者が福音のメッセージを鵜呑みにせず、自分のことばで福音を語れるまで掘り下げて考えることによって正しい聖書解釈に立つことが異端に対して最も効果的な備えだと思います。これから真理の柱である教会を建て上げるためにしっかりと学んでいきたいと思っています。

「確信をもちた自分のことば」を聞く人は必ず目を傾けて
くれる。故に 真理を、愛と知恵に基づいて語り続けよう。
我、この青春者へとこの訓を授けよう新くす。

'98.3 11/12.